

## 「批判的思考力」育成をめざした体育・スポーツ哲学の授業に関する研究：具体的事例（5 打席連続敬遠）から

著者	深澤 浩洋
雑誌名	体育学研究
巻	64
号	1
ページ	303-313
発行年	2019-06
権利	(C) 2019 一般社団法人 日本体育学会
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00157884">http://hdl.handle.net/2241/00157884</a>

doi: 10.5432/jjpehss.18013

## 「批判的思考力」育成をめざした体育・スポーツ哲学の授業 に関する研究：具体的事例（5打席連続敬遠）から

森田 啓<sup>1)</sup> 荒牧 亜衣<sup>2)</sup> 植木 陽治<sup>3)</sup> 深澤 浩洋<sup>4)</sup>

Hiraku Morita<sup>1</sup>, Ai Aramaki<sup>2</sup>, Yoji Ueki<sup>3</sup> and Koyo Fukasawa<sup>4</sup>: Research for classes of Philosophy of Physical Education and Sports to encourage “critical thinking”: from a specific example (giving a batter an intentional walk 5 consecutive times). Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

**Abstract:** The purpose of this research is to consider ways to encourage critical thinking in Philosophy of Physical Education and Sports classes. Introductory classes for students specializing in sports education were observed. Students reviewed a specific example in which a batter was given an intentional walk five consecutive times and they aimed to consider the case critically.

Right after watching the case on screen, students noted whether they agreed with such a practice or not. Then, 3 points were explained and students noted their opinion again.

The 3 points were;

- (1) position of activities of sports clubs
- (2) regarding it as a competitive sport
- (3) regarding it as part of education (Physical Education)

In 4 years, 8 classes were held and 1,020 students participated in them. 118 of them (11.5%) changed their opinion after listening to the explanation. It must prove that those students were able to analyse even their own initial judgement critically and perceive it differently.

Furthermore, the following became clear from comments written after the classes:

By watching and using a specific example on screen, there is a possibility to eliminate/reduce negative images some people hold towards sports(P.E.) philosophy or philosophy. It also increases the possibility to engage students positively by introducing active learning of actually thinking and writing down their opinions.

**Key words :** fair play, pursuit of victory, activity of sports clubs, active learning

キーワード：フェアプレイ，勝利の追求，運動部活動，アクティブラーニング

### I 問題の所在

OECD（経済開発機構）は現代社会の特徴として「知識基盤社会」、「成熟した市民社会」、「リスク社会、格差社会」、「多文化共生社会」の4つを

掲げる。しかしフェイクニュースが飛び交うポスト・トゥルース時代において知識基盤社会は成立しない。また新自由主義がもたらす大きすぎる格差はさまざまな分断をもたらし、多文化共生社会を破壊するだろう。現代ほど教育が重要な役割を担う時代はないといってよい。OECDのPISA調

1) 千葉工業大学先進工学部  
〒275-0023 千葉県習志野市芝園 2-1-1  
2) 仙台大学体育学部  
〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18  
3) 大阪学芸高等学校  
〒558-0003 大阪市住吉区長居 1-4-15  
4) 筑波大学体育系  
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1  
連絡先 森田啓

1. Faculty of Advanced Engineering, Chiba Institute of Technology  
2-1-1 Shibazono, Narashino, Chiba 275-0023  
2. Faculty of Sports Sciences, Sendai University  
2-2-18 Funaokaminami, Shibata-machi, Shibata-gun, Miyagi  
989-1693  
3. Osaka Gakugei Senior High School  
1-4-15 Nagai, Sumiyoshi-ku, Osaka 558-0003  
4. Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba  
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574  
Corresponding author hirakumorita@p.chibakoudai.jp

査（学習到達度調査）において常に上位に位置するフィンランドでは、学力を構成する要素として「発想力」、「論理力」、「表現力」を特に中核要素と位置づけ、その土台の上に応用力である「批判的思考力」、「コミュニケーション力」育成を重視する。多くのヨーロッパ諸国でもこの学力論は共通しており、「批判的思考力」を育むことが重要とされる。尾木（2012）は「その時々々の政治や社会のあり方、あるいは自分の考え方自体にも批判をもてる豊かで深い思考力」である「批判的思考力」育成の重要性を指摘する<sup>注1)</sup>。

体育、スポーツの領域においても、あいかわらずなくなならない体罰、暴力、セクハラ問題、ドーピング問題（薬物、遺伝子、パラドーピングなど）、一流スポーツ選手による問題行動（違法賭博、補助金不正申請、大麻等薬物問題など）、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の招致の際には「復興の加速と世界への感謝」を第一項目に掲げたにもかかわらず、復興が進むよりも置き去りにされるとの意見が多い<sup>注2)</sup>など、問題点は数えきれない。体育、スポーツの専門家、あるいはそれをめざす者であればなおさら体育、スポーツそのものに対して批判的なまなざしを向けなければならないだろう。

体育・スポーツそのものに対して批判的な思考を行う役割は体育・スポーツ哲学が担うものである。体育やスポーツという対象そのものが一体何なのか、現代において体育・スポーツが存在するのはどうしてなのか<sup>注3)</sup>。こういった問いも含めて、体育・スポーツを批判的に考察することが求められる。本研究では体育・スポーツを専門とする学部の大学生を対象にした授業において、批判的思考力育成をめざした授業について考察する。

## II 授業概要等

### 1. 授業の位置づけ、概要

対象とする授業は大学において体育・スポーツを専門とする学部の1年生を主な対象とする「体育哲学」という名称の科目である<sup>注4)</sup>。シラバスに記載している「授業概要」は下記のとおりである。

る。

授業概要：「体育とは何か」について、哲学的にその概念基盤に論究するとともに、体育の可能性に言及する。体育の実践原理や意義を知り、現状を批判的に検討する思考態度を身につけることをめざす。

### 2. 授業内容

今回考察対象とするのは「体育哲学」の初回の授業である。初回授業のテーマは「体育とスポーツの違い」である。対象とする授業は「体育哲学」であるが、3年生の開講科目に「スポーツ哲学」という授業もある。そのため両者の違いをはじめに明らかにしたいと考えた。哲学というと、説教臭い、難しい、といったマイナスイメージをもつ受講生が多いことが予想される。それを払拭するためにも具体的事例を扱っている。解答を提供するのではなく、考える機会を提供する内容としている。また講義形式の授業であるが、受講生の提出したレポートをもとに双方向授業をめざしている。

#### 2.1 基本用語の解説

初回の授業は用語の解説から開始する。「体育哲学」についての解説は図1のとおりである。なお体育については樋口（2005）、佐藤（1993）を、スポーツについては楠戸（2013）およびギブニー（編）（1994）を参考にしている。

体育は「physical education」の翻訳語である。したがってもともとは「身体+教育」である。身体を対象にした教育である。教育とは「他人に対して意図的な働きかけを行うことによって、その人を望ましい方向へと変化させること」（松村明（編）、1995、p.643）である。しかし身体を対象にした教育といっても、それが何なのかは自明なことではない。発育発達は関係しそうだが、人間性の育成などはどう関係するのか<sup>注5)</sup>。これらについてはこの授業では詳しく取り上げないが、体育哲学は「身体を対象にした教育を哲学すること」である。哲学とは「世界や人間についての知

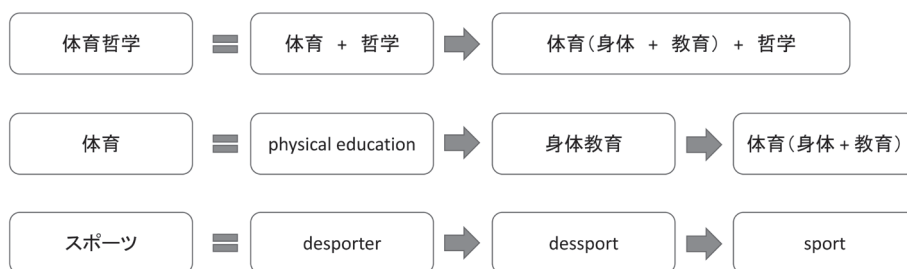


図1 用語の解説

恵・原理を探求する学問」である（松村明（編），p.1743.）。

「体育」と「スポーツ」の意味の違いを認識することは体育・スポーツの専門家としては重要なことである。ではスポーツとは何か。スポーツはもともと「気晴らしをする」desporterから変化した「気晴らし」「楽しみ」「遊ぶ」dessportに由来する。産業革命時の過酷な労働環境の中で、わずかな余暇時間に人々が「気晴らし」「楽しみ」のために行ったことがスポーツであった。

ここでは単純化するために体育を学校で行われるものに限定し、体育とスポーツの違いを以下のようにする。

体 育：全員が嫌でも受講するもの、教育上必要なこと。

スポーツ：やりたい人が主体的に行うもの、やりたくない人はやらないもの。

## 2.2 5 打席連続敬遠の是非①

体育とスポーツが交錯する事例として運動部活動を取り上げる。文部科学省は運動部活動を「学校教育活動の一環」と位置づけているが、実際どう評価すべきか難しい問題である。

取り上げる事例は、1992年8月16日に行われた第74回全国高等学校野球選手権大会2回戦の明德義塾高校（高知）対星稜高校（石川）戦で、松井秀喜選手（星稜）が5打席すべて敬遠されたことである。この事例は「勝利を追求する当然のプレイ」という意見と「フェアプレイに反する卑怯なプレイ」という意見に分かれ、社会的論争を巻き起こした。松井選手の5打席を中心に編集した実際の映像<sup>注6)</sup>を見てもらい、5打席連続敬遠

に賛成か反対か、またその理由を5分間で記述してもらおう。その際、必ず「賛成または反対」を表明するように指示している。

## 2.3 考えるべきポイントの解説

前述したように「勝利を追求する当然のプレイ」と「フェアプレイに反する卑怯なプレイ」に意見が真っ二つに分かれたが、どうしてこのようなことになるのだろうか。考えるべき点はいくつかあるが、この授業では3つのポイントから考える視点を提示する。1点目は、「スポーツ（競技スポーツ）」なのか「体育（教育の一環）」なのか、2点目は「競技スポーツ」ととらえた場合、どういう原理・原則が働いているのか、3点目は「教育」ととらえた場合、この行為はどうか評価できるか、ということである。

1点目であるが、文部科学省は「中学校、高等学校における運動部活動は、学校教育活動の一環として、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒の自主的、自発的な参加により、顧問の教員をはじめとした関係者の取組や指導の下に運動やスポーツを行うものであり（後略）」<sup>注7)</sup>と定義している。運動部活動は「教育の一環」と位置づけられる以上、勝敗よりも人間的成長に重きが置かれるべきであろう。しかし同時に「より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、学校生活に豊かさをもたらす」ことから、いろいろなことを考え、工夫をして勝利をめざすことも否定されることではない。文部科学省は「教育の一環」と定義しても、実際にはどうかであろうか。教育的配慮、人間的成長よりも勝利を重視して取り組んでいるチームもあるので

はないか。

2点目であるが、「競技スポーツ」としてとらえた場合、どういう原理・原則が働いているのか。最も大事なことは「勝利の追求」である。全く逆の「わざと負ける行為（八百長）」を考えればわかりやすい。実際に2012年ロンドン大会バドミントン競技で生じた「無気力試合」も同様である<sup>注8)</sup>。しかし「競技スポーツ」が「勝利の追求」という原理・原則だけで成り立っているとすると、問題が生じることが危惧される。ばれさえしなければ「薬物を使用してもよい」「相手にけがをさせてもよい」「相手の飲み物に禁止薬物を混入してもよい（パドローピング）」等である。その一方で、私たちは本気で勝利をめざしている中で「勝利から遠ざかる行為」に称賛を送る事例があることを知っている。1984年ロサンゼルス大会柔道無差別級で相手のけがした個所を狙わずに勝負したモハメド・ラシュワンは同年に国際フェアプレイ賞を受賞した。1996年フィリッパモリス・チャンピオンシップ最終日15番ホールでゴルフボールの下敷きになっていた赤トンボを1打罰のパナルティを知りつつボールを持ち上げてトンボを逃がした福沢義光プロには、同年日本フェアプレイ賞が授与された。サッカーでけが人が出てピッチに倒れこんだ際には相手チームがボールを所持していてもサイドラインに蹴りだしてプレイを止める「フェアプレイ」は、今やサッカー界では常識になっている。「勝利の追求」という原理・原則だけから考えると、勝利の確率を上げるためにけがしている個所を攻めるべきだし、トン

ボがいようがそのままボールを打つべきだし、相手が痛がって倒れば相手は1人少ないのだからそのまま攻めるべきである。しかし相手もわざとけがをしたわけではない。本気で勝利を追求する中でも、勝利の追求からは遠ざかるが相手への配慮、思いやりある行為をスポーツ界ではフェアプレイとして称賛してきた<sup>注9)</sup>。競技スポーツは「勝利の追求」、「勝利から遠ざかる行為（フェアプレイ）」の両方から成立しているといえる。

3点目であるが、「教育」としてとらえた場合、相手が優れた選手（チーム）であっても、野球でいえば敬遠のように勝負を逃げたりしないで、正々堂々と勝負して、何とか工夫して勝利をめざすことが推奨されそうである。しかし、やはり勝利するためにその選手とは勝負を避けるということも工夫のひとつであるだろう<sup>注10)</sup>。

本講義では3つのポイントを解説したが、いずれも敬遠に賛成する立場と反対する立場の両方が含まれている。解説を聞けばどちらかに意見がまとまるものではない。受講生がどのポイントのどの考えに最も納得するかによって賛否に影響を与えることが予想される。1点目の「スポーツか体育か」における「勝敗か人間的成長か」は二者択一すべきではなく、両方もめざされるもの、あるいは重視する割合の問題といえるかもしれない。また2点目の「勝利の追求と勝利から遠ざかる行為」も二者択一ではなく、場面や状況において変わるものともいえよう。しかし本講義においては、受講生が最初に出した意見自体を批判的に考察する機会としたいため、あえて対立する部分

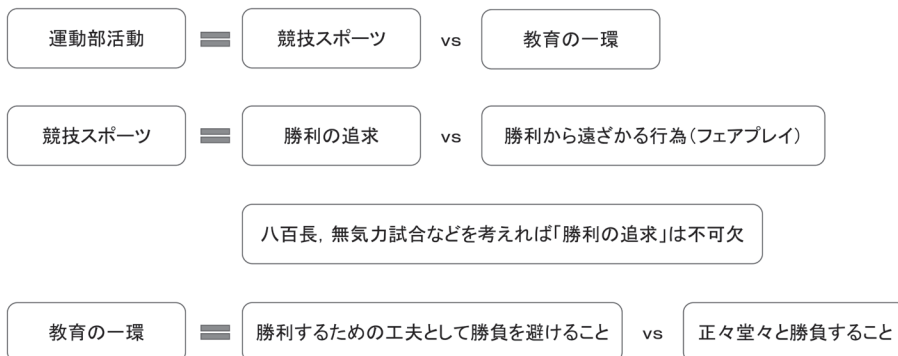


図2 考えるべきポイント3つ

を強調して解説した。3つのポイントで述べたことが二項対立、二者択一ではないことは次の時間等で補足説明する必要があると考える。

## 2.4 5 打席連続敬遠の是非②

上述した解説の後、この回の授業の最後に、再度、5打席連続敬遠に賛成か反対か、またその理由を記述してもらう。その際、1回目と同様に、必ず「賛成または反対」を表明するように指示している。

1回目（映像を見た直後）と2回目（解説を聞いた後）における賛否の人数は表1のとおりである<sup>注11)</sup>。4年間計8回、合計1,020人が受講した<sup>注12)</sup>。1回目では5打席連続敬遠に賛成480人(47.7%)、反対496人(48.6%)と、意見がほぼ半数に分かれた。なお必ず賛否を明確にするよう指示しているが、37人(3.6%)の受講生は明確にしない、もしくはできなかった。解説をした後の2回目では賛成423人(41.5%)、反対560人(54.9%)であった。118人(11.5%)が解説を聞いた後で賛否の考えを変えている。

### III 受講生の回答内容と考察

#### 1. 1回目と2回目の回答についての考察

授業者の感想であるが、ほとんどの受講生は解説を聞いた後の2回目の回答で考察が深化している。今回は、1回目の回答（映像を見た直後）と2回目の回答（解説を聞いた後）の回答で意見が

変わった受講生118人のうち、考えるべき3つのポイントのうちのどれが最も影響したかを調査したところ、表2のとおりとなった<sup>注13)</sup>。1回目の回答「賛成」で2回目の回答「反対」になった91人のうち半数以上の48人(53%)が1点目の考察ポイントである運動部活動の位置づけについて考慮した結果、意見が変わっている。この場合、運動部活動は「教育の一環」としてとらえる見方である。また2点目の考察ポイントによっても38人(42%)が意見を変えている。ルールに反する行為ではないが、ルールさえ順守していれば何をしてもよいわけではなく、フェアプレイには反するというとらえ方である。1回目の回答「反対」で2回目の回答「賛成」になった受講生は27人と少数であるが、そのうち23人(85%)の受講生は2点目の考察ポイントによって意見を変えている。競技スポーツととらえるのであれば「勝利の追求」は最も重要な態度であり、不可欠なものである。人数は少ないが、3点目のポイントにはこの事例の特徴が表れている。「賛成」から「反対」、「反対」から「賛成」へといずれも意見を変えた受講生がいたが、同じ理由である。前者は「運動部活動は教育の一環であるのに勝つための工夫や努力をせずに敬遠した」ことを反対にした理由としており、後者は「運動部活動は教育の一環であり、勝つために敬遠を選択した」ことを賛成にした理由にしている。現象としては敬遠という同じことであっても、それはフェアに勝負しなかったという評価なのか、勝つために考えて工夫した

表1 1回目と2回目の賛否

	①賛成→②賛成	①賛成→②反対	①反対→②反対	①反対→②賛成	その他
2014A	54	11	61	2	6
2014B	45	12	56	4	10
2015A	44	13	63	4	8
2015B	35	13	65	3	5
2016A	60	7	53	2	2
2016B	43	13	60	2	3
2017A	72	8	48	5	3
2017B	43	14	63	5	0
合計	396	91	469	27	37
%	38.8	8.9	46.0	2.6	3.6

表2 意見が変わった理由 (①運動部活動は教育の一環、②「勝利の追求」「フェアプレイ」、③教育における工夫、④その他)

	人数	①賛成→②反対				人数	①反対→②賛成			
		①	②	③	④		①	②	③	④
2014A	11	5	6	0	0	2	0	1	1	0
2014B	12	8	3	0	1	4	0	3	1	0
2015A	13	4	8	0	1	4	0	4	0	0
2015B	13	7	7	0	0	3	0	3	0	0
2016A	7	6	0	0	1	2	0	2	0	0
2016B	13	1	9	0	4	2	0	2	0	0
2017A	8	8	0	0	2	5	2	4	1	0
2017B	14	9	5	1	1	5	0	4	0	1
合計	91	48	38	1	10	27	2	23	3	1

という評価なのか、である。

④その他では以下のような意見が見られた。「スポーツとは何か?」という本質に関することで、互いに力を出し合うことが良いという回答や、観客の位置づけや視点に関するもので、観客も含めてプレイの良し悪しを判断する当事者であるという回答や、敬遠が無制限に許される野球のルールが問題という回答や、3年間の集大成であるという甲子園大会の位置づけについての回答である。

## 2. 自由コメントの考察

授業の最後に受講生には意見、感想を書いてもらっており、それについて紹介したい。自由記述なので実に多くのことが書かれるが、主なものは以下のとおりである。

まず「哲学のイメージ」に関するコメントには以下のものがあった<sup>注14)</sup>。

「体育哲学は難しそうで嫌だと思っていたが、興味ある内容で面白かった」(2014A)

「哲学は難しいというイメージから面白いに変わった」(2015A)

「哲学は言葉が難しいだけで、普段私たちが考えているようなものであることが分かった」(2015A)

「哲学と聞いて…だったが、面白かった」(2016A)

「具体的事例から答えの出ないことを考えるの

が哲学らしく楽しかった」(2016B)

「哲学と聞いて面白くないと思っていたが、具体的事例を使用して理解しやすかった」(2017A)

最初から楽しい授業だと思っていたと記述した受講生は皆無だった。コメントにあるように哲学は難しい、嫌だ、面白くないと思っていた学生に対しては、体育哲学や哲学に対する悪いイメージの改善に貢献できる可能性があると思われる。

授業で映像を用いることについては以下のコメントがあった。

「実際に映像を見たらあまりに残酷だった」(2014B)

「映像は見ていてつらかった」(2015B)

「ルールに反していないし問題ないと思ったが、実際に映像を見たら両チームの選手の表情、スタンドの雰囲気など、異常だとわかった」(2015B)

「悲しい映像だった。野球に対する侮辱だと感じた」(2016B)

「戦術としてありだと思っていたが、実際に映像を見たらひどかった」(2016B)

「映像を見てイライラした。メガホンを投げ入れた観客の気持ちがよくわかる」(2016B)

「途中で映像があったので集中して考えることができた」(2017A)

「映像を見るまでは当然の作戦と思ったが、実際に見たら反対意見になった」(2017B)

5打席連続敬遠は有名な事例であるし、書籍も発行されている。しかし実際の映像を見ることで衝撃を受けたり、考えを変える受講生もいることが明らかになった。この事例においては実際の映像を視聴することが考察を深めるために効果があると考えられる。

授業の最初に解説した体育とスポーツの違いについては、その重要性を認識したとのコメントが多く寄せられた。

「体育とスポーツの違いをきちんと理解することが重要」(2014A)

「体育とスポーツでは矛盾があるもので面白いと思った」(2016A)

「体育とスポーツが全く異なるものであることが理解できた」(2016B)

「体育とスポーツの違いが理解できた」(2017A)

「体育かスポーツかでこれほど悩まされるとは思わなかった」(2017A)

また、哲学的思考、原理・原則から考えることについては以下のコメントが寄せられた。

「原理・原則から考えることで、普段考えなかったことを知ることができる」(2014A)

「原理・原則から考えることで、なぜ意見が分かれるか理解できた」(2014A)

「スポーツを原理・原則から見る視点を知れてよかった」(2016A)

「2つの相反する原理・原則を理解してすっきりした」(2016A)

「体育哲学の重要性が理解できた」(2016B)

「スポーツを哲学的側面から考えることの重要性が理解できた」(2016B)

視点、立場の違いを考慮することの重要性に関しては以下のコメントが寄せられた。

「視点を少し変えると見方、考え方が変わってくる。多様な視点から考える必要がある」(2014A)

「賛成に変わらないが、反対する人の考えや立場は理解できた」(2014A)

「明徳の投手の勇気にも気づいてあげたい」(2014B)

「最初は第三者的立場から考えたが、講義を聞いて当事者の立場から考えてみた」(2016B)

「観客も含めてスポーツを考える必要がある」(2017B)

本研究で対象にした運動部活動については以下のコメントが寄せられた。

「運動部活動は体育でもスポーツでもない特別な存在。これからも考えたい」(2014A)

「運動部活動を教育ととらえるかスポーツととらえるかで判断が異なる事例があることに驚いた」(2014B)

「自分は部活動を体育ととらえていたが、他の部員はどうだったのか」(2015A)

「来年度から教師をするが、人間的成長を最優先に取り組みたい」(2015B)

「部活動は教育と位置づけられているが、実情は異なると思う」(2016A)

「部活動に対する考え方が変わった」(2016B)

またこの授業の受講生は教員免許状取得をめざす受講生が多いことから、将来教師になったことを考えてのコメントも寄せられた。

「自分が指導者になったらと考えさせられる授業だった」(2014B)

「将来教師になったときに必要な授業だと思った」(2015A)

「将来指導者になったときに強くしたいが、そのために何をしてもよいわけではないことを



伝えたい」(2016A)

「運動部活動は、将来教師になったら教育として取り組みたい」(2016B)

「教員にやりがいを感じた」(2017A)

「将来高校教師になりたい。部活動指導について考える良い機会となった」(2017A)

フェアプレイに関しては以下のコメントがあった。

「勝利の追求とフェアプレイのバランスが難しい」(2014A)

「サッカーやゴルフの例と敬遠は同じではない。ランナーを出すことは危険なこと」(2014A)

「フェアプレイは勝利から遠ざかる行為というのが印象に残った」(2015B)

「サッカーやトンボの事例と敬遠は異なると思った」(2015B)

「柔道の谷亮子氏はけがをしている個所を攻めるのが優しさと言っており、フェアプレイは難しい」(2016B)

「サッカーやトンボの例と敬遠を結びつけるのは無理がある」(2016B)

「トンボを逃がすためにペナルティが課されるのではなく、ルールを変えたほうがよい」(2017A)

解説では勝利から遠ざかる行為の例として、けが人が出たときにプレイを止めるサッカーの例、トンボがボールの下にいたためにペナルティを受け入れてボールを動かしたゴルフの例を紹介した。これらは明らかに勝利から遠ざかる行為といえよう。一方、敬遠はランナーを出すため失点につながるリスクがあり、一概に勝利に近づくプレイとは言えないという反論である。敬遠の事例は「正々堂々と勝負しない」というフェアプレイに反する事例として取り上げており、サッカーやゴルフの例のように純粋に「勝利から遠ざかる行為」とは言えない可能性もあることから、この点には補足の説明を加える必要があるかもしれない。

この授業では、考えて意見を記載するスタイルを採用しているが、その件について以下のコメントがあった。

「とても考えさせられる講義で面白かった」(2014A)

「とても考えることのできる授業だった」(2014B)

「答えが出ないから放置してよいのではなく、より深く考える必要がある」(2015A)

「自分で考えて意見を出すスタイルが良い」(2015B)

「自分の意見を出す授業は初めてだったので楽しかった」(2015B)

「考える授業は少ないので、考える授業は重要」(2015B)

「自分の意見をぶつけることができる有意義な授業だった」(2015B)

「考える時間が多いので楽しい」(2016B)

「具体的事例から考えるのがわかりやすかった」(2016B)

「思っていたより多くのことを考えさせられた」(2017A)

また、授業中に2回意見を書く方法を採用しているが、意見が変化することについて以下のコメントがあった。意見が変わるということは自らの意見に対しても批判的思考ができていく証拠といえよう。

「賛否は変わらないが、講義を聞いて自分の考えに揺らぎが出た」(2014A)

「意見は変わらなかったが、考えは深まった」(2014B)

「講義を聞いて自分の意見が変わったのは意外だった。映像より先に講義を聞いたなら逆の意見になっただろうか」(2015B)

「講義を聞いて意見がこんなに変わったのは初めてで、不思議な感覚」(2015B)

「意見は変わらなかったが、もう少し考えれば変わるかもしれない。変わるかもしれないと

「思えたことがよかった」(2015B)  
 「これからのスポーツ観を変えることができた」  
 (2016B)  
 「賛否悩んだが、講義を聞いて勝利より大切な  
 ものがあることに気づいた」(2017A)  
 「少し見方を変えるだけで意見が変わり得ること  
 だと感じた。自分も変わった」(2017B)  
 「映像を見ただけと、講義後の考えでの違いに  
 驚いた」(2017B)

わずかな講義を聞くだけで意見が変わったことに  
 驚いた受講生もいた。正しいと思ったことでも、  
 ちょっとしたこと、異なる立場などを考慮すること  
 で価値判断が変わりえることに気づいてくれれば、  
 批判的思考の重要性を理解してもらえないだろうか。

また、対象とした授業は講義形式であるが、双  
 方向授業、ディスカッション形式の授業を希望す  
 るコメントも寄せられた。

「周りの人にどれくらい賛成派、反対派がいる  
 のか知りたい」(2016A)  
 「ほかの人がどう考えているか知りたい」  
 (2016B)  
 「周囲と意見交換したり議論する時間があつた  
 らより充実する」(2017A)

講義形式ではあるが、翌週に賛成、反対の人数  
 や、代表的なコメントを紹介し、フィードバック  
 に心がけている。

体育・スポーツ哲学の究極の問いは「体育とは  
 何か」「スポーツとは何か」という本質論であるが、  
 これに関連するコメントも寄せられた。

「素晴らしい態度、姿勢で取り組むことでスポ  
 ーツの社会的価値が高まると思う」(2015A)  
 「ルールがすべてと思っていたが、ルール以  
 外にも考えなければならないことがある」  
 (2016B)  
 「スポーツとは何かを改めて考えさせられた」  
 (2017B)

この講義をきっかけにさらに深く体育・スポー  
 ツについて追究してもらいたい。

最後に批判的なコメントも紹介したい。

「ルール違反はないし、賛否を議論する意味が  
 分からない」(2014A)  
 「映像や講義を聞いて自分の意見を出す授業は  
 よいが、体育哲学が何を学ぶのかははっきりし  
 ない」(2016A)  
 「面白くない。言葉に対する追求が深くなされ  
 ていない」(2016B)  
 「学習指導要領の部活動の扱われ方の変化を扱  
 っていない」(2016B)  
 「答えが出るわけではないので、賛否を議論で  
 きる問題ではないのではないか」(2016B)

最初と最後のコメントは、5打席連続敬遠の賛  
 否を問う本講義の方法に対する批判的意見であり、  
 批判的思考を促したい本授業の目的を次の授  
 業で再度説明する必要があるだろう。学習指導要  
 領の指摘は1年次の受講生ではなくすでに多くの  
 科目を履修している上級生からのコメントであつ  
 た。本授業では学習指導要領の変遷まで踏み込む  
 必要はないと考える。

#### IV 批判的思考力と今後の課題

本研究では、体育・スポーツを専門的に学ぶ学  
 部の大学生を対象とした体育・スポーツ哲学の授  
 業において、批判的思考力の育成をめざした授業  
 について考察した。対象としたのは初回の導入ク  
 ラスである。そこで、5打席連続敬遠という賛否  
 が分かれる具体的な事例を考察することによって  
 目的の達成をめざした。

映像を見た直後に5打席連続敬遠の是非を記述  
 してもらい、その後3つのポイントについて解説  
 した。3つのポイントとは、運動活動の位置づけ、  
 競技スポーツとしてとらえた場合、教育の一環(体  
 育)としてとらえた場合である。4年間合計8回  
 の授業において、1,020人が受講し、118人(11.5%)

が解説を聞いた後で賛否を変えている。一度自ら判断を下したことについてさえも批判的にとらえなおすことができた証拠といえよう。

授業の際に提出してもらったコメントからは、以下のことが明らかになった。映像を用いて具体的事例を扱うことで、体育哲学や哲学に対して抱いていたマイナスイメージを払拭することができる可能性があること、また実際に意見を考えて記述するというアクティブラーニングを導入することにより、積極的に取り組む可能性が高まることである。受講生が提出したレポートやコメントは受講生の授業の理解度を知るためだけでなく、授業改善のための資料でもあるし、授業者の考察を深化させる資料でもある。受講生の記述したものを分析、考察することは重要な研究である。

数年先のことはわからない変化の激しい時代に入っている。体育・スポーツ界も同様である。数年前にはわが国で起こるなど予想もできなかったトップアスリートのパラドーピングや強化費の不適切申請などの問題も起きている。従来の知見だけでは対応できない事態も今後は起こりえる。常にどうすればよりよくなるかを考える批判的思考力の育成は重要である。

対象とした授業では、導入回のほかにも具体的事例を扱っている。これらについては他稿で考察したい。

## 注

- 1)尾木直樹 (2012)「学び」という希望：震災後の教育を考える。岩波書店, pp.47-60.
- 2)2016年12月8日付河北新報オンラインニュース。宮城県内の107人を対象に行った意識調査で、五輪によって東日本大震災からの復興が、「進む：14.3%」「復興が置き去りにされる：39.3%」「どちらとも言えない：39.3%」「分からない：7.1%」となった。
- 3)川谷茂樹 (2005) スポーツ倫理学講義。ナカニシヤ出版, p.5.
- 4)体育・スポーツ専門の学部の1年生を主な対象としているが、体育・スポーツ以外の学部の学生(自由選択科目として)や2年生以上も受講可能である。
- 5)川谷茂樹 (2005) 前掲書。p.5.
- 6)松井選手の5打席のほか、9回表の第5打席四球後にメガホン等がレフトスタンドから投げ込まれ、それを

係の人たちおよび星稜高校ナインが片づける様子、勝利した明德義塾高校の校歌斉唱中に浴びせられた「帰れコール」、試合後の実況と解説の部分に編集したもの。

- 7)運動部活動活動の在り方に関する調査研究協力者会議 (2013) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書：一人一人の生徒が輝く運動部活動をめざして。p.1.
- 8)2012年ロンドン大会バドミントンの無気力試合は予選最終戦で負けたほうが決勝トーナメントで有利な相手と対戦できることが原因であり、予選の結果で決勝トーナメントの相手が決まっているシステムの問題である。予選で負けることで最終的にはより良い結果(勝利、順位)をめざしているので勝利を追求しているとはいえるが、無気力試合自体は競技を成立させないといえるだろう。
- 9)この「勝利の追求」と「フェアプレイ」については川谷を参考している。川谷茂樹 (2005) 前掲書, pp.21-40. なお「フェアプレイ」には川谷が述べている「勝利から遠ざかる行為」以外のフェアプレイも存在する。本講義では広瀬 (2005) が提示した「スポーツマンシップ」「フェアプレイ」を紹介したうえで、川谷のフェアプレイを用いている。
- 10)明德義塾の場合には、勝利後のインタビューで投手が5打席すべて敬遠するのは監督の指示であったことを明らかにし、監督もその指示を認めている。選手が自ら考えて敬遠をしたのであれば、どう評価すべきかは難しいと思われる。
- 11)4年間8回の授業で内容は少しずつ改善しているが、主な内容は変えていない。
- 12)本研究では受講生が記載したものを考察対象としているが、研究に使用することおよび個人が特定されるような内容は使用しないことを説明の上、同意を得た受講生の記載内容を扱っている。
- 13)表1の人数と合計が一致しないのは、複数のポイントを記述した受講生がいるためである。
- 14)受講生の記述した文章については著者が内容が変わらないように書き換えている。また、項目に該当する部分のみ記載した。

## 文 献

- フランク・B・ギブニー (編) (1994) ブリタニカ国際大百科事典10 (第二版改訂) ティービーエス・ブリタニカ。
- 樋口聡 (2005) 身体教育の思想, 勁草書房。
- 広瀬一郎 (2005) スポーツマンシップを考える。小学館。
- 川谷茂樹 (2005) スポーツ倫理学講義。ナカニシヤ出版。
- 楠戸一彦 (2013) ドイツ中世スポーツ史研究入門。溪水社。
- 松村明 (編) (1995) 大辞林第二版, 三省堂。
- 尾木直樹 (2012) 「学び」という希望：震災後の教育を

考える. 岩波書店.  
佐藤臣彦 (1993) 身体教育を哲学する: 体育哲学叙説.  
北樹出版.  
運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議(2013)  
運動部活動の在り方に関する調査研究報告書: 一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して.

(2018年3月6日受付)  
(2018年9月6日受理)

Advance Publication by J-STAGE  
Published online 2019/1/15